

学校は地域の宝

校長 米村 圭史

先日、私が2校目として勤めていた霧島市立塚脇小学校が閉校となりました（当時は国分市立塚脇小学校）。最後は児童数3名だったようで、仕方がないとはいえ、自分に関わりがあった学校がなくなるというのは、何とも寂しい気持ちになり、考えることもたくさんありました。

平成8年、26歳で私が赴任した時も全校児童8人の極小規模校でした。職員数は子供たちと同じ8人でした。学校は国分市役所から20kmほど離れた台地に位置し、生活圏は福山町牧之原です。学校の隣には県の畜産試験場があり、学校は試験場の牧草地の隣にあり、まさに牧場の中に学校があるような小さな集落でした。

赴任した年の5月、PTA愛校作業の前日、校長先生が明日作業に来られる方のためにイモの天ぷらを揚げようと言うので、夕方二人で家庭科室に材料を持ち込み、イモ天を300個近く揚げました。P戸数は4戸しかないのに、イモ天を揚げすぎではないかと思いましたが、校長先生の指示どおり、ひたすらイモ天を揚げました。

愛校作業当日、学校のシンボルツリーでもあるセンダンの木陰の所に、乳母車を改良した手押し車に腰かけた大勢の高齢者の姿がありました。愛校作業のために集まってくださっていたのです。その姿を見て、ようやくイモ天の意味が分かりました。（確かに300個揚げてよかった。）

高齢者だけではなく、愛校作業には集落の方全員が参加してくださいました。草刈りをしてくださる方、ペンキを塗ってくださる方など、参加された方々が子供たちのために、自分ができることを一生懸命取り組んでくださいました。高齢者の中には、不自由な体を地面に横たえて草を取ってくださる方もいました。

作業後、長机の上に新聞紙を広げ、竹かごに入れた例のイモ天を並べました。参加してくださった皆さんが、美味しそうにイモ天をほおばりながら口々に言いました。「お兄ちゃん、（私は26歳でした㊦）学校は、地域の宝よ。」

「学校は、地域の宝」。集落の皆さんの何気ない一言でしたが、この言葉は、その後の赴任先でもずっと自分の仕事の核となるものになりました。

星原小学校では「プロジェクトほしはら」という会で、学校の未来のこと、うみがめ留学生のこと、そして地域と連携した教育活動について話し合いを行っています。話し合いの内容から、どうにかして星原小学校を盛り上げていきたいという皆さんの熱意を感じます。地域の懇親会の中でも「星原地区は、星原小学校を中心としながら、地域を盛り上げんといかんぞ」と言う話を伺います。PTA準会員の方々からも「何かあるときは声をかけてくれ！」と言って下さっています。私は、会の話し合いの内容やお話を伺いながらとても嬉しく思うと同時に、自分が大切にしてきた仕事の核をあらためて再認識することとなり、身の引き締まる思いがしました。

5月16日は、住吉小学校と合同の「第91回仲良しすもう大会」が行われました。住吉小学校での開催にもかかわらず、地域の方々にたくさんの応援をいただきました。

星原小学校は「地域の中の学校」「地域とともにある学校」、そんな学校であり続けるために、情熱をもって取り組んでいきたいと思っています。

